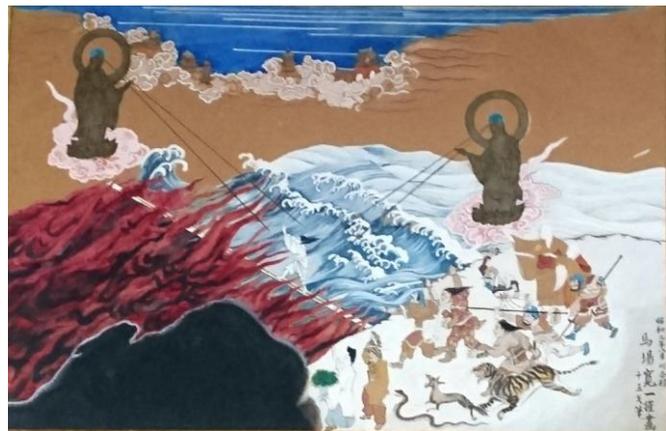


# 「家がいいね」 第160号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2017.9.1

「世も末」でも、人は生きなければならぬ



母の実家の寺の本堂に絵が掛けられていました。昭和9年15歳の少年が奉納しました。里帰りで産まれた私は67年間この絵を眺めています。火と水に襲われる隘路を一人で行かなければなりません。この光は何処から来るのか？「生きる」の声は自らのもの？

1年の3分の2が過ぎましたね

約8ヶ月前の大晦日。篝火は頃合いを見て奉仕の方が薪をついでくれます。準備されている薪を勝手に持ち帰ったり、余分に投入する人がいたりすれば、参拝する人を朝まで温められないでしょう。



お互いが等しく分かち合う

ということは、このように自然に見えるのです。街に高齢者の姿が多く、子どもの声が響かない時代が進行しています。分かち合う生活が日々大切にになっていくでしょう。この先は誰かが得をし、誰かが儲けるということが頭を離れないのは止めたいものです。経済成長を追えば追うほど、個人は無理を重ねるし地球ですら疲弊します。地球はどのような形でも回ります。それが末の世でも、私達の子や孫は生きなければならぬ。あなたは何を残せますか？



私からのお便り、届いていますか？

クリニックを始めて15年、在宅医として、本人ご家族から、沢山の経験を教えていただきました。死に臨んで怖いばかりではないと。何より、ご臨終の顔は微笑んでいます。申し上げたきは以下の如く。

**まず、人の死を歳とともに**

衰え行く命の流れとして平静に受け止めることは、医者にとっても難しいようで、看取りしていただく医師は多くありません。最期は病院に任せるという方向が未だに大勢です。病院に行けば治療のフルイに掛けられ、ご自身の意思を通すのは困難な現状です。どこから変えるべきかお考え下さい。

次に病院や医療は、地域の公的社會資源なので使う立場で関心を持って頂きたい。救急病院的質を求めるのは相互責任です。慶友や田中病院が建て替えを始めますが、私立病院に対しても皆様の望む道は表明すべきです。「家にも帰れるか」と。

特に、建築が進む市立伊勢総合病院には危惧を持っています。病院は地道に人が作り上げるものですが、経営改善や医師確保での変化が伺えませんが、地域医療（とりわけ在宅医療や緩和ケア医療）に公立病院の果たす役割は、どの地域でも大きいはず。大きく新しい病院建屋ができたとしても、その先に持続が可能か、お考え続けください。

最後に、介護施設も含む話題です。住み慣れた所で最期まで過ごすのが理想なら、地域包括ケアⅡ「ほとんど自宅（在宅）たまに施設まれに病院」を、何回と無く繰り返した結果、臨終が訪れるのだと感じます。しかし死ぬ場所を選ぶ事はできても、死ぬべき時間は選べません。ただ感慨深い時間を共有すると、あの人は良い時を選んだなあと思われれます。逝く人の人生の実力なのでしょう。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御園町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
メール [homecare@kr.tep-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tep-ip.or.jp)  
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可